

## 〈連載〉

徒然文生噺

イラスト：山本悠、構成：服部円

## 第一段 「日々の営み」

『文化と生物』というお題をもとに有識者が徒然なるままに寄稿する本連載。

初回はクリエイティブコーダーの高尾俊介さんと生物学者の菅野康太さんに寄稿してもらった。

## 無意識がつむぐ落書きのように

高尾俊介（クリエイティブコーダー）

この数年間、コード（プログラム）を書いてグラフィックやアニメーションを生成し、SNS でシェアすることを毎日続けている。しかし、人に話すと過剰にストイックな行為と受け取られることがある。実は、誰かとの長電話中に気づかぬうちにメモ帳に落書きができるように、ぼんやりとタイピングして惰性でコードを書けるようになったことが、デイリーコーディングの最大の成果だと思っている。プロセスエコノミーやコミュニケーション資本主義のような言葉も登場していて、それを自分の経歴に当てはめることに違和感を覚えることもある。コーディングを始めた 2015 年当時、中年に近づく中で「何かを達成しなければ」という強迫観念から逃れるように、ひっそりと個人的なコードを書き始めた。IT 用語をかけたダジャレのコンテストを個人主催したときも同じ心境だった。

活動の原点には思惑やエコノミーなんて欠片もなく、ただ下手なダンスでも踊れるような余白があった。その原点を忘れないように、これは宇宙人へ向けたご当地お土産で、自分は人間国宝を目指しているんですよと、冗談交じりの真顔で語っている。

## 観念的繋がり以上に、感触を求めて

菅野康太（生物学者）

鹿児島に来てから釣りを始めた。釣具屋に行ってみて欲しい。恐ろしいほどの種類の釣具が存在する。最初は、各釣具について全く理解できないと思う。しかし、その品数・種類の多さからも分かるように、釣りには多くのファンがいて、地方ごと・魚種ごとの文化圏がある。海で出会う老人に知識をもらうことも多いし、最近では釣りの YouTuber もいて、人気アングラーの SNS でのフォロワー数はいわゆるインフルエンサー級なのだ（これまで知らなかった文化に驚く）。

釣り上げる際はいつも、以前の僕が体感したことがない生物とのリアルなやり取りを感じる（生物学者なのに）。自分の一投にも釣具にも、魚の行動を予測した「今、これで釣れる」という仮説があり、その釣果の積み重ねが釣りという文化になっている。釣具の種類は、狙う魚の生態に対応しているというわけだ。

文化と生物学の繋がりや、いわゆる都市的なものから一度距離を取ると見えやすくなる。しかし、一度見えてしまえば、都市の中でも自然と人工物の境界などにその関係を見ることができるようになるし、思わず見ようとするようになるだろう（海や川があれば必ず魚影を探します）。



## 高尾俊介（たかお・しゅんすけ）

1981年熊本県出身。クリエイティブコーダー。2019年、プログラミングを日々の生活や来歴、風土や固有の文化と結びつけるための活動としてデイリーコーディングをスタートする。2021年、NFTアートプロジェクト「Generativemasks」を発表し、発売から2時間あまりで1万個完売し話題となった。一般財団法人ジェネラティブアート振興財団代表理事。

<https://twitter.com/takawo>



## 菅野康太（かんの・こうた）

博士（理学）。生物学者。鹿児島大学法文学部人文学科心理学コース准教授。超音波で交わされるマウスの音声コミュニケーションを研究している。鹿児島の銭湯は全て温泉なのだが、「温泉に入るとき、おっさんはなぜ声を出すのか（最近僕も出す）」という問いに通じるような、音声による情動情報の授受に関する神経科学的・進化的背景に興味がある。

<https://twitter.com/canno696show>

## # 服部メモ

クリエイティブコーダーとして活躍する高尾氏は、毎日コードを書き作品を生成するデイリーコーディングや SNS 上で IT 用語と駄洒落による言葉遊びを競う #takawo 杯 IT 駄洒落コンテスト など、個人のささやかな活動から大きなムーブメントを起こす人物だ。目的なくコードを毎日書くことはすぐに世界を変えるわけではないかもしれないが、ヒトがヒトとして生きる理由に値する文化的な営みのひとつといえる。

生物学者である菅野氏は、自らの研究活動以外に学際的な SYNAPSE Project などサイエンスコミュニケーションの活動を積極的におこなってきた。（10年以上前、SYNAPSE Project での研究者たちとの出会いが、私が編集者から研究の世界に飛び込むきっかけとなった）。彼の SNS から垣間見る鹿児島での暮らしは、神経科学という最先端分野の一端を担う研究者とは思えないほど穏やかだ。

ふたりの活動から見えてくる、日々の営みにおけるささやかな発見や驚きを見逃さず大切に育てる姿勢に、今日も少しだけ励まされるのである。